分　科　会

第1分科会　地域の子育
子どもも大人も育ちあう
～孤育てから地域でつながる子

御津防災キャンプ

第３分科会　地域福祉
サロン交流

第5分科会　地域づくり

第１分科会　地域の子育て支援

子どもも大人も育ちあう～孤育てから地域でつながる子育て～

◆趣旨

岡山市の各公民館では、さまざまな活動をとおして、子どもと子育て中の人、子育てを応援したい人がつながり、お互いに学び合いながら成長しています。 地域で子育てって、どうしたらいいの？私にも何かできる？子どもたちの明るい未来のために今からできることをいっしょに考えます。今回は発達障害をテーマに地域の子育て支援を考えます。

◆実践報告のテーマと発表者

①発達障がい定例座談会「あおぞら」～学びから広がる新たなつながり～

岡西公民館職員：小谷　文子　、発達障がい定例座談会「あおぞら」参加者

②イチから知りたい！発達障害～話すことでホッとできるゆるやかな学びの場～

操南公民館職員：万代　賛誉

◆流れ

１．事例発表

２．グループワーク

（１）自己紹介

（２）話し合い

①発達障害についてあなたが持つイメージは？

②発達障害のどんなことが知りたいか？

（３）各グループの意見を共有

３．助言者からの意見

◆話し合われたこと

保護者、支援者、関心のある人と幅広い参加があり、グループ構成によっては話し合いテーマを「発達障害をよく知らない人が持つイメージ」「知らない人に向けて発達障害のどんなこと知ってもらいたいか」などと工夫して話し合った。どのグループも非常に活発に話し合いが行われ、当初の予定より話し合いの時間を延ばすほどであった。

テーマ①については、「できる、できないの落差が大きい」「過敏」「こだわりが強い」「コミュニケーションが取りにくい」などの意見多く出される一方、「個性豊か」「好きなことへの集中力がすごい」「まじめ」といったプラス側面の意見もあった。

テーマ②ついては、「そもそも発達障害とは」「接し方、関わり方、言葉のかけ方、対応の仕方」などのほか、「相談や支援先、制度について」知りたいという意見も多く出された。

◆議論のまとめと今後への課題

助言者から「発達障害の人のことを理解するには共に過ごす時間を長くすること。そして発達障害を理解するというよりその人を理解し、最終的にその子が幸せになることが目標。そのためには、どんなふうに育ってきたか、そしてその子が主人公になれる場所があることが大切である。」と話があったが、さまざまな立場の人が集い、語り合い、共有しつながること、それこそ公民館活動をとおして実現できることである。その上で、地域の子育て支援をはじめとする様々な地域活動に取り組むうえで多様な立場の人が集い、語り合うベースづくりが非常に重要だと実感した。

◆助言者の感想

臨床心理士・NPO 法人岡山県自閉症協会理事　土岐　淑子

第一分科会では、「孤育てから地域の子育て」の取り組みの一環として、「発達障害」をテーマにした２題の貴重な事例発表がありました。岡西公民館の＜発達障がい定例座談会あおぞら＞と、操南公民館の６年目になる講座＜イチから知りたい発達障害＞で、市民と職員で工夫を重ね実践されてきたものでした。

発達障害は、マスメディアでも取り上げられ、一般に知られる機会が増えましたが、特性の理解や障害の意味についての理解は十分とは言えません。分科会では、其々の参加者がもつ発達障害の「イメージ」を共有しあい、「知りたいこと」について熱心に話し合われました。

発達障害の特性の現れ方は環境に大きく影響されるため、画一的に理解しようとするのでなく、知識を得るにとどまらず、知り合い、わかり合う機会を持つことが大切です。理解はともに過ごす時間によって深まるもの。そのための出会いの仕掛けが必要です。

公民館が仕掛け人となって、「場」が作られ、学びと理解が地域にゆるやかに広がっていく、その先には多様な生き方が認め合える社会があると思える分科会でした。

◆分科会運営委員（市民）の感想

万富公民館利用者　岡本　美枝

万富公民館で子育ての講座に関わらせていただいているご縁で、この度の第一回岡山市立公民館大会に市民運営委員として参加しました。

大会当日の分科会では参加者の発達障害についての思いをグループワークの中で活発に出し合い、更に助言者の土岐淑子先生からは、「発達障害のある人との関わり方で重要なことは、その人と出会って、共に過ごす時間をとり、目の前にいるその人を理解すること。」という助言をいただきました。私は今まで理屈や知識だけで発達障害を理解しようとしていました。公民館では、世代を超えた多くの人と出会います。これからは、その人の内面を見る様に心掛けようと思いました。

最後に、公民館は、地域の人が出会って、お互いを分かり合える場、色々な人と活動して自分を発揮できる場です。これからも利用者同士が学びあい、感動しあっていきたいと思います。

◆分科会運営委員（職員）の感想

中央公民館職員　森川　千裕

分科会の開催まで、職員と市民の運営委員で何度も話合いの場を持ち、準備をしてきました。テーマは昨年と同じですが、「今年は発達障害についてもっと知りたい！」という意見が多く、今回の事例発表とグループワークを計画しました。

当日は、グループワークの時間が足りないほど大変盛り上がりました。参加者のみなさんの実体験や思いを聴かせてもらいましたが、どれもとても印象的で、ネットや本で調べることも大事ですが、人と話して得るものは大きいと改めて感じました。そして、一生懸命話してくださる気持ちが温かく、みなさんが公民館を好きでいてくださっていることが感じられ、とても嬉しかったです。さらに今年は助言者の先生に分科会を締めくくっていただいたことで、より深い学びにつながりました。市民の方も、職員も今回得たものを地元に持ち帰り、地域の子育て支援について考え、今後の活動に活かしていきたいと思います。

第２分科会　防災・減災

御津を守るのは私たち。～御津防災キャンプの取り組みから～

◆趣旨

岡山市では地域住民の防災力向上を図るため、防災キャンプが地域ごとに行われています。その中で御津地域では中高生がリーダーとして参加し、運営の一翼を担っています。この分科会ではその中高生たちが体験した活動の発表を通して、自助・公助・共助による減災を目指して、市民一人一人がどのように取り組めばよいかを考えます。

◆実践報告のテーマと発表者

・岡山県立岡山御津高等学校：河田　紗穂、篠田　みずき、堀田　成美
・御津防災キャンプ実行委員会：藤井　賢一

◆流れ

岡山御津高校の生徒３名が防災キャンプに参加した体験を寸劇で披露し、御津防災キャンプ実行委員が御津地域の防災の取り組みを発表した。発表の中で、人が倒れた時の応急手当の実践も行った。事例発表の後は、参加者５２人が７グループに分かれてワークショップを行った。グループを高校３年生のクラスに見立て、学級委員長（進行係）と副委員長（書記）を選出し、参加者が高校生になりきって、「文化祭の防災展示啓発コーナー」の企画書を作成した。ワークショップの過程でグループごとに、アルファ米をビニール袋や新聞紙で作った皿を使って工夫しながら分けて試食し、企画のアイデアに活かした。最後に、完成した企画書をグループごとに発表した。発表を聞いて、各自が一番いいと思う企画書にシールを貼り、シールの数が多かった上位３位のグループに所属する高校生と助言者からコメントをいただき、みんなで共有した。

◆話し合われたこと

御津高校生徒の寸劇は、最初は全く防災に関心がなかった高校生が、先生の勧めで防災リーダーとして防災キャンプに参加し、地域と関わる大切さを学び、将来の目標ができるまでに心境が変化していった様子を描いたものだった。この発表を受けて、全く防災に関心のない若者に関心をもってもらうにはどうすればよいか、そのきっかけとなるような文化祭での啓発コーナーを、各グループで議論しながら企画した。若者の考えをつかむため、グループに一人以上の現役中高生に入ってもらった。全てのグループが、防災・減災に取り組むために工夫を凝らし、展示だけでなく体験やゲームを盛り込んだ内容の企画書を作り上げた。

◆議論のまとめと今後への課題

平成２９年度「岡山市立中央高等学校文化祭」企画書提出に向け、御津高校・岡山後楽館高校の生徒も加わりグループ討議をした。「防災屋敷」・「みんなで学ぼうキラキラＢＯ―SAI」・「竹内涼真と握手会～ポイントをあつめよう～」・「命が助かる～避難袋とは?～」・「防災は未完成　継続できる防災をめざそう」・「知って楽しむ防災教室」・「あなたは無事に家族を助けられるか?」の各タイトルが話し合いで決定され、実施計画をめぐって熱心に討議された。大人だけでは思いつかないような新鮮な企画もあり、地域での活動に即対応可能な内容であった。どのグループも日ごろの防災・減災の取組が体験として活きており、展示だけではなく実際の災害を想定しての疑似体験ができる工夫があった。訓練に、より多くの人を集めるには、若者の意見の吸収が必要なことも再認識できた。

今後の課題としては、御津の発表のように、“命を守る地域の輪”中高生も大活躍!となるような若者リーダーをそれぞれの地域でどう育てるか。また、幅広い年齢層の訓練参加や、家庭での減災・防災意識を定着させるための、より効果的な取り組みの構築など、体験の積み重ねの必要性が確認された。

◆助言者の感想

ＮＰＯ「まちづくり推進機構岡山」理事　徳田　恭子

災害の少ない岡山市でこのような中央公民館主催の「防災・減災」の分科会を開催されたことは素晴らしい。最初に御津地区の中高生と地域住民による寸劇の事例紹介があり「心肺蘇生やAED（自動体外式除細動器）などの応急手当」を分かりやすく演じていた。

次に参加者全員が高校生になり文化祭で防災に関する展示の企画書を作るという設定でワークショップを行った。各クラスから企画の発表があったが、全てのクラスが体験を通じて防災力を高め、実践できる内容となっていて評価できる。

また防災・減災に関心の薄い中高生が分科会に参加し、皆さんと一緒に企画・感想・投票したことは斬新である。今後、各地区の災キャンプに中高生の参加を呼びかけ、中高生がリーダーとして運営の一部を担うようになれば，地域の防災力は大幅に増すであろう。

後半にアルファ米を参加者が箸、スプーン等使わないで工夫して食べることに挑戦していたが実践的で良かった。

南海トラフ巨大地震が近々発生すると言われている現在、このような分科会を公民館職員と市民が合同で開催する取り組みは自助・共助のための実践的な活動に繋がり、大変有意義である。

◆分科会運営委員（市民）の感想

佐藤　誠

防災・減災分科会に参加して

事例発表は岡山御津高等学校生徒の寸劇で、教師からすすめられ講習会に参加して、自分達の郷土を守るリーダーとしてやりがいを見つけ頑張る決意が表れていた。参加者の中から突然大きな叫び声が上がり、倒れた。何事かと見ていると、先ほどの寸劇の生徒達が「皆さん落ち着いてください」と駆け寄り、心肺蘇生の　　救急処置を施した。突然の演出には驚いた。こんなことも実際に起こりうることなので、これも防災キャンプに必要かなと思った。

ワークショップでは「高校の文化祭でどんな防災の展示啓発コーナーを作るか」というテーマで、７グループにわかれて内容を考えた。発表後の採点では、上位の内容は今回参加の学生主導の、ユーモアを交えた人気俳優のサインをもらえる特典や、煙の中で被害者を救出する体験であった。そうか、若者や市民の気持ちをとらえるのは大きな副賞と人助けが人を集めるコツだったのかと、いまさらに意識を変えさせられた。これからの活動はそれらを参考に推進していこうと教えてもらった 1 日だった。今回は、各グループに学生の参加があり新鮮な若者の意見が聞けたことはよかった。

◆分科会運営委員（職員）の感想

山南公民館職員　清水　申美

担当館職員での準備会、市民の方を交えた運営委員会を開催し、分科会開催に向けて話し合いを重ねました。特にワークショップの内容については、助言者の徳田先生のアドバイスを受け、より充実したものにするために何度も修正を行い、当日を迎えました。

この分科会ならではの、高校生による寸劇は、防災キャンプ体験前後の心の動きを分かりやすく表現し、堂々と演じた素晴らしいものでした。このような若者が地域でたくさん育ってくれると頼もしく思います。公民館が地域の方々と共に中高生へ活躍の場を提供し、その成長を支援することの必要性、また高校生を巻き込んで防災をテーマにまちづくりを進めていくことの重要性を再確認しました。

運営に関わってくださった全ての皆様の協力により作り上げることができた分科会であり、心から感謝します。高校生からパワーをもらった分科会でした。

第３分科会　地域福祉

住みなれた地域で自分らしく生き生きと暮らせるまちづくり

◆趣旨

岡山市における６５歳以上の高齢者人口は１８万人を超え、市民の４人に１人が高齢者という「超高齢社会」を迎えています。高齢者が孤立しないように気軽に集まることができるカフェやサロンの活動、地域の中で楽しく継続的に行っている見守り活動の実践をとおして、地域の力を掘り起しながら、支え合い、自分らしく生き生きと暮らせる地域をどうつくっていくかを考えます。

◆実践報告のテーマと発表者

①人と地球に優しい、地域コミュニケーションづくり～ＥＳＤオープンカフェ三木～
松本晃昭（あかれんがクラブ）、大森美幸（東公民館職員）

②サロン交流会～小地域で自発的に立ち上がったサロン活動と公民館との関わり～
船守敬子（津高グリーンハイツふれあいサロン世話人）、宍戸總子（横井ほがらかサロン代表）、花房聡子（津高公民館職員）

③福祉委員・援護委員による見守り活動
本澤美夜子（富山学区福泊町内会）

◆流れ

３つの事例発表の後、休憩をはさんで助言者の事例発表を聞いたのち、７グループに分かれ、「地域でどんな活動ができるか、したいか」「公民館の役割や期待」をテーマに話し合いを行い、各グループからどのような意見交換がされたか、報告した。

◆話し合われたこと

テーマ①「地域でどんな活動ができるか、したいか」

・スタッフの高齢化、次世代の育成。

・若い人たちとの交流。次世代の担い手育成につながる。

・年をとっても住みやすいまちづくり。いろいろな立場の人たちが意見を出し合える場をつくる。

・サロンの充実、身近な場所を高齢者の居場所に。

・高齢者の見守り活動

・先進地への視察等の学び。

テーマ②「公民館の役割や期待」

・地域への情報発信、情報交換の場。広報に工夫が必要。若者の参加を増やすための取り組みが必要。若い世代と高齢者が話し合えるような、例えば「公民館居酒屋」ができるとよい。

・地域貢献できる人を育成できる場。

・公民館は地域のキーステーションに。公民館で出会った人たちを地域へつなげ、広げていく役割。活動のコーディネート役をつとめてほしい。

◆議論のまとめと今後への課題

どのグループも活発に意見交換がなされた。地域が違っても共通の課題も多く、活動の担い手の高齢化、次の担い手の発掘・育成に苦慮している、交通の便が悪く活動するにも移動手段がない、男性の参加が少ない、若い世代の参画が課題といった声が多く聞かれた。

話をする中で「地域でどんな活動ができるか、したいか」ということが「公民館の役割や期待」につながっていることを実感した。また、若い世代の助言者が地域づくりに関わっている活動紹介から、若者の参画が今後必要であるといったヒントが得られた。今後も、それぞれの地域で活動していた人が継続してつながり、事例から学んだり意見交換したりすることが必要であると感じた。

◆助言者の感想

みんなの孫プロジェクト　代表　水柿　大地

高齢化や過疎化、人の繋がりの希薄化は日本中のどこを切り取ってもその声が聞かれるほど、今日では当たり前な地域の課題となってきています。その課題を解決する上で、地域の文化や暮らしに寄り添って立つ公民館が果たせる役割というのは決して小さいものではありません。岡山市内各地の公民館が一堂に会して旗振りをし、地域での実践事例を意欲ある地域住民同士が学び合うことができる場を創出されたことは、これからの地域づくりを進めていく上でも大変意義深いものであったと思います。私が担当させていただいた第三分科会「地域福祉」で事例発表をされた 3 団体の方も素晴らしかったですが、参加された皆さんからも敬意をもって話を聞く姿勢が見られたことはうれしいものでした。

実践からくる経験談は、地域同士、住民同士が共に意欲や実践力を高め合うための肥しになると私は考えています。公民館大会は公民館に関わる住民、スタッフが共に学び合う姿が結集していた素晴らしい場でした。来年以降、さらに良い場がつくられ、関わりの輪が広がっていくことを期待しております。

◆分科会運営委員（市民）の感想

中山学区連合町内会長　伊庭紘一

「住みなれた地域で自分らしく生き生きと暮らせるまちづくり」をテーマとし、地域福祉に関わる３つの事例発表とその後のワークショップは、地域で高齢者福祉活動に取り組んでいる者として、大変興味深く聞かせてもらいました。

事例発表の「ＥＳＤオープンカフェ三木（さんもく）」「津高地域サロン交流会」「福祉委員・救護委員による見守り活動」は、いずれの活動も高齢化が進展し超高齢社会の現在に欠かすことのできない生活支援や介護予防であり、発表内容からそれぞれの地域の抱えている課題の解決に向け本気で取り組んでいる姿を伺うことができました。

ワークショップでは、①どんな活動ができるか・したいか②公民館の役割や公民館への期待を話しあいましたが、①については特に目新しいものはなかったように思う。②については私個人として、地域の連帯感が薄れ地域コミュニティの低下が進んでいる現在、「公民館が協働の拠点となり、地域の各種団体を繋げていくコーディネーターの役割」を期待したいと思っています。

最後に、分科会の準備から運営に携わってくださった公民館職員のみなさんご苦労さまでした。

◆分科会運営委員（職員）の感想

上道公民館職員　片山　るみ

一宮、福田、津高、上道、東、富山、高島、京山の公民館職員と市民運営委員で分科会の運営を担当しました。テーマや発表事例について打合せを重ねる中で、お互いの活動について理解が深まり、地域を越えた新たなつながりもできました。

当日は狭い会場に多くの参加者が入ることになり、どうなることかと思いましたが、発表する方々のお人柄にも助けられ、温かく和やかな雰囲気の分科会となりました。普段からそれぞれの地域で活動されている参加者がほとんどなので、グループワークでも活発な議論が行われていました。

事例発表３本と助言者の活動紹介だけでも盛り沢山の内容で、グループワークの時間が不足気味だったのは残念でしたが、「住みなれた地域で自分らしく生き生きと暮らせるまちづくり」に向けて、人や情報が集まる場であり、つなぐ機能を担う公民館への期待が寄せられ、充実した分科会になったと思います。

第４分科会　若者の参画

若者が躍動する地域社会をどう創るか

◆趣旨

若者のもつ構想力や行動力を、資源としてどう地域社会に活かすのか。そして、若者が地域の未来をつくる主役となるために、どんな居場所やつながる機会があるのか。若者たちと語り合いながら、若者が躍動する地域社会をどう創るかを考えます。

◆実践報告のテーマと発表者

・世代を超えた地域住民が集い交流できる場づくり
　地域活性化団体Mingle（ミングル）代表：西山　杏美
・「らっかんランチ食堂」～地域をつなぐ後楽館の挑戦～
　岡山市立後楽館高校有志

◆流れ

・公民館とつながりを持って積極的に活動している若者グループ（地域活性化団体Mingle）と、これから地域や公民館と一緒につながりを強めながら活動を広げていきたいと思っている若者グループ（岡山市立後楽館高校）の２グループからの実践を聞いた後、【若者が地域社会と関わることで、どんな利点（イイコト）があるのか】をテーマに、「えんたくん」を使ってグループに分かれて話合い共有した。

◆話し合われたこと

・中高生、大学生の参加もあり、各グループでそれぞれの思いや意見が出された。肯定的で未来へ向けての公民館の役割や、若者が躍動する地域社会を作っていくにはどんなことが大切なのかを共有することができた。
　＊ボランティア活動から地域や公民館に関わることが多い。中高生の活躍の場となり、学校外での社会との関わりを作ることができる。学校と地域とのつなぎ役として公民館の役割が期待される。
　＊公民館では地域の様々な年代の人と関わりを持ったり、その人の人生を垣間見たりすることができる。そのことにより、若者が社会に出る前に多様な人とのコミュニケーション術を身に付けたり、違う価値観に出会えたり、自分のライフプランを考えるヒントを得ることができる。
　　→人生の可能性が広がる。
　＊自分達の思いや考えを形にすることが公民館ではできる。自己実現の場のひとつになる。役割があり担い手として参画できる居心地のいい場所に公民館や地域がなることで、若者はそれを忘れず次世代へつないでいくことができる。
　＊地域の人は若者が頑張る姿を見てエネルギーをもらい元気になることができる。

＊そもそも若者にとってイイコトと地域にとってイイコトは同じなのか？

＊オープンなつながりや交流が必要。若者世代が大学や雇用で地域外に出て行くことも多いが、地元に帰ってくる人もいる。地域外で学んだことや経験したことを地元で活かすことでいろいろな活動が広がっていく=ＥＳＤ的

◆議論のまとめと今後への課題

そもそも若者にとって地域社会で関わることの利点（イイコト）と地域にとっての利点が本当にマッチングしているのか？ということが最終的に議論の中心となった。何かを企画する時、若者と地域それぞれに理想を描いてもらい、それをマッチングさせアクションへつなげることが大切。そこに公民館や地域がどう関わっていけるかが今後の課題と考える。そして、公民館活動の中で「若者の参画」は数年来言われていることで、それがまだ実現していないのはなぜなのか？公民館に中高生が安心して雑談ができるたまり場を作ったり、参加しかさせていない大人ではなく、共に参画できる大人になっていくことが必要でなはいかとの提案も出された。

◆助言者の感想

中国学園大学子ども学部講師　野村泰介

第４分科会「若者の参画」でのグループワークの共通テーマが「若者が地域社会と関わる事で、どんな利点（イイコト）があるのか」ということで、参加者から様々な意見が出されていました。その中で印象的だったのが、若者と地域社会の担い手（高齢者？）とでは「イイコト」の定義が違うのではないか、というもの。若者の地域に対するニーズと、地域社会の担い手が若者に期待することがズレていないか。公民館だけでなく、地域全体でこの議論をしっかり深める必要があるのではないかと思います。私は日ごろ、多くの中高生と接する機会が多いのですが、地域と関わりたいと考えている若者は一定数います。彼らの「何かやりたい！」という気持ちを引き出すコーディネーターと、それを実現させる資源（場所・資金）を地域全体で提供できる仕組みが整えば、「若者が躍動する地域社会の創造」は実現するのではないでしょうか。

◆分科会運営委員（市民）の感想

灘崎公民館利用者　木山勝之

私は灘崎公民館に連れてこられて青少年育成のお手伝いをしているボランティア１年生です。具体的には灘中のボランティア組織「チーム灘」の生徒さんをサポートすることが中心で、今回の参加は研修の意味だったと思います。その研修がうまくいったか・・・、グループトークでピント外れな発言でみなさんに混乱を与えたがうまくまとめてくれて逆に理解できたり、助言者の、「イベント企画は理想をまず考えて現状を近づけるアクションを行なう」「若者が継続する秘訣は大人が資金と場の提供に徹する」に納得できたりした。

規模の大きさと遠くからの参加者に驚いたが、この大会の目的は何なのか疑問が湧き、試行錯誤するうちに自分なりに、この大会に参加するまでは遥か遠くにいた「ＥＳＤ」の視点が近づいてきたような気がしたのは不思議だった。それが、この大会の力だったのでしょうか。

◆分科会運営委員（職員）の感想

西大寺公民館：石垣真由美

私は、今大会において「若者の参画」分科会運営メンバーとして参加しました。会議は、初めから熱い議論を交わすことができました。「公民館に若者がこない」という問題意識を皆で深堀りし、「公民館に来る・来ないを問わず、若者が自分らしく地域で輝くためには何が必要かを語ろう！」という主旨の素晴らしいテーマに決定。公民館らしい楽しい雰囲気になりそうな予感がしました。

西大寺地域の青少年育成関係団体メンバーをお誘いし、迎えた当日、佐藤先生のご講演で「公民館とは」という全体像をそれぞれの参加者が学び、その後の分科会では予想通り熱い議論を交わし合いました。私が一番感動したのは、小学生のころに公民館を利用していた女子大学生が、地域の小学生に体験の場をつくっている実践を、堂々と希望を持って発表していたことです。このような若者が増えたらいいな、そのために公民館ができることはたくさんあるなあと改めて気づかせていただきました。最後、西大寺地域の参加者たちと「楽しかったね～！」と喜び合いました。地域で活動している人たちと「公民館ってすごいね！」と語り合えた事が、財産となりました。

第５分科会　地域づくり

未来へつなげる地域の宝～つなげていこう人と人の絆～

◆趣旨

地域にある史跡や自然を守るだけでなく、地域の宝を活用しながら、人と人のつながりを築き、住民主体の地域づくりを進めていく方策を考える。また、地域づくりに関連する公民館職員や実際に活動している方、これから取り組みを考えている方との交流も図る。

◆実践報告のテーマと発表者

①「地域に眠る魅力を起こす　～歴史文化を形に残し、次世代につなげる～」
　発表者　妹尾公民館　井戸マッププロジェクトメンバー
②「子どもたちへつなぐ瀬戸の宝物　～豊かな自然　多様な生きもの～」
　発表者　瀬戸町ダルマガエルの会メンバー

◆流れ

１．分科会開会・趣旨説明
２．事例発表
３．ワークショップ①：グループ内での自己紹介と、事例発表を聞いての質問・感想を出し合う
４．質疑応答：ワークショップ①で出された質問に発表者がそれぞれ回答
５．ワークショップ②：「地域づくり」として今後やってみたいこと、事例発表を聞いて、自分がやってみたいと思ったこと、既に取り組んでいることについて話し合い。
６．グループごとに意見を発表・共有
７．分科会のまとめ

【事例発表の概要】

井戸マッププロジェクトの発表では、現存する井戸を調査し形に残す「井戸マップ」作りを出発点に、完成したマップを持って井戸をめぐるウォーキングを実施し、そこから地域に現存する史跡などを様々な機会と形で次世代に繋げ発展させていく活動の報告であった。対象も地区内だけではなく、隣接する学区にも声をかけ、活動の輪を広げる試みがなされている。今後は地域内の歴史文化等の調査を継続しながら記録することでそれらを形に残し、より多くの地域の人たちへ伝承する仕組み作りを行いたいという思いが語られた。

瀬戸町ダルマガエルの会の発表では、ダルマガエルを切り口に１人で開始した活動が公の活動になり、生きもの全般に活動の幅を広げながら仲間を増やしていった経緯、参加者だった子どもがボランティアスタッフとして活動をしている学びの循環モデルを提示した。そして、瀬戸の宝物である自然環境を子どもたちへつなぐために、公民館を拠点として地域・学校・企業との連携を一層強化し、豊かな自然環境を守っていきたいという意志が示された。

いずれの事例も学びの成果を形にして、その成果物をどう活用するのか見据えた活動であった。

◆話し合われたこと

２つの事例発表を聞いた後、７つのグループに分かれ、グループ内での自己紹介と発表に関する感想および質疑応答を行った。その後、「『地域づくり』として今後やってみたいこと」をテーマに、「やってみたいこと・今取り組んでいること」を個人で書きだした後、グループで共有し、それに対する「質問」と「アドバイス」をグループごとに話し合った。

☆公民館を憩いの場（スペース）に、行ってみたくなる公民館に

…男性とのつながりが少ないのでサロンを通して参加を呼び掛ける

老人クラブと共催にする、ＥＳＤカフェをする、図書コーナーを居心地良くする

☆地域の宝発見を一緒に

…成果物をどういかすか？→「つくる」のが目的ではなく、「使う」のが目的

☆地元にある貝塚の研究を詳しく知らせたい

…地域の歴史を研究→保存会や語る会を作ったらどうか？→既成組織の活用（ゼロからよりも）

→有志の会がいい（町内会でなく）

☆公民館まるごと博物館（学芸員をおいてエコミュージアム）（青）

…学芸員ではなく、賛同する人で集まろう！

…歴史を映したＤＶＤの活用→シティミュージアム、図書館、ＲＳＫ、岡大などの活用

→公民館の持っている資料の活用を考える

…今までの資料プラスアルファでネット上への公開をしたい（青）

…活動を自然体に広げれられたらいいのに

…学校での活動をしたい（生徒を巻き込む）（青）

◆議論のまとめと今後への課題

グループワークでは「地域づくり」について、地域にある宝に焦点を当てながら議論を深めたグループが多かった。

地域の宝はどこにでもある。しかし、その宝を見つけられない、当たり前すぎて宝として認識できていないことが多い。そういった宝を見落とさないためには様々な視点で地域を見つめる必要がある。

また、活動の後継者を作り、次世代・若い世代や子どもたちに繋げることが重要である。地域の歴史文化を学ぶ入り口は小学校の授業で、その続きは社会教育で行うことが理想である。学校と地域を繋ぐ役割として期待されるのが公民館である。「いいところを子孫の代まで」継承していくために、10年、２０年、５０年後の地域を見据えながら活動をしていくことが今後の課題である。

◆分科会運営委員（市民）の感想

岩本　潤一

第１回公民館大会を終えて

岡山市内の全ての公民館に、市民の活動を報告する機会を設けた事は大変意義のある事だと思います。

昨年のプレ大会から関わり、本大会でも発表させて頂いた事は、今まで長年やってきた事が無駄ではなく、やっと少しずつ実をつけているのが実感できるような大会となりました。

これだけの規模の催し物をするのは、ここにくるまでの準備の大変さは想像できます。ただ「取り敢えず」やってみようから始まった事は継続しないと意味がなくなります。規模はどうであれ、続けられることを望みます。

残念なこともあります。地元の公民館では大会に参加した人以外は、ほとんど大会の事を知らないか無関心です。他の館の状況は如何でしょうか。もう少し多くの人に関心を持って貰える大会になればと思います。

◆分科会運営委員（職員）の感想

妹尾公民館職員　細川由起

普段はあまり接することが無い他館で活躍されている市民の方々と、公民館の職員とが一丸となり『分科会をよりよいものに、そして成功させよう』という同じ目標に向けて、打合せや議論を交わした時間は、大会を終えて振り返ってみると大変貴重な時間だったと思います。

当日の分科会では、実践報告として自分たちの活動を自分たちの言葉で市民の方が発表されたこと、その後のグループワークが活発に行われている様子を見て、参加者各々がに地域に愛着を持ち、地域で何かをやりたいという思いがあるのだということが、ひしひしと伝わってきました。

そして、地域の歴史文化を学ぶ入口は学校教育、その後は社会教育＝公民館ということ、学校と地域を繋ぐという意味でも公民館へ多くの皆さんが期待を寄せて下さっていることを改めて感じ、身の引き締まる思いがしました。

この分科会で今後の課題とされた「活動の後継者の育成」や、数年後ではなく「１０年、２０年、５０年後を見据えた活動」をしっかり視点に入れた公民館事業に取り組んでいきたいと思います。